
うちの子変化

音無 無音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うちの子変化

【著者】

ZZマーク

N7932R

【作者名】

音無 無音

【あらすじ】

ある日を境に芦田萌音の私物が擬人化して…！？

あじだもね

彼女、芦田萌音の家では、普通では非日常のことが、日常のよつに行われていた。

「あ、烈火くーん。お皿とつてえ」

「はーい、お母様」

赤髪のキャラそうな彼は烈火。

元々は赤い小さなひざ掛け毛布だった。

「ママさーん、お腹すいたあ」

「あらあ？どうしたの？ご飯まだだからまつてねえ」

この小さな子は夢斗。

元はオレンジ色のふわふわクッショーン。

「ただいまー。買出し終わつたよ

茶髪の彼は宗。

元、茶色いクッショーンだった。

「おかえりなさい。あら？萌音は？」

「見てないですよ」

と、飛びついてきた夢斗を抱き上げながら言った。

「それにいいのよお？敬語じゃなくても。」「いえいえ」

彼らは何かの力でこうして生きているのだ。萌音が起床すると共に三人は人間と化す。

そして、この芦田家は布団制なので、

誰かが布団を敷いた時点で三人は元に戻るのだ。もとに戻ってもなお、話は出来るのである意味便利（？）だ。

「ただいまあ

と、萌音が言うと三人は準備を放り投げて萌音のもとへ向かった。

「おかえり！もーちゃん！」

「むーちゃん元気だつた？」

夢斗の頭をなでる萌音。

「おかえり。今日の晩飯はなあ

「知ってるよ、烈火。グラタンでしょ

チエ、とぼやく。

「おかえり。」

「宗。ただいま。」

この三人の名付け親は他無しの萌音である。

「ねえ、もーちゃん！お買い物連れてつてよお

「やだ。だつて途中で寝るじゃない」

「ねーなーいーかーらあああ

「じゃあ明日ね。お休みだし

「俺らもついてつていい？」

烈火が便乗した。

「ダメつていつたら？」

「泣く

「子供が

まあいいけど、と仕方なく呟く。

お買い物

翌日。

三人（実質一人）が駄々をこねたせいで、萌音は三人と買い物に行くハメになつた。

「もーちゃん。とおいーだつーおーー！」

「もう、そつなるから嫌だつて言つたの。宗と一緒に帰つてもうつ よお？」

「歩く」

「子供が」

しまつた子供だ！

我ながら子供に何を言つてゐるのか、と反省する萌音。

「どうかあんたら買うものあるの？」

「ねえよ？ 服とか欲しいとか思つちやつたりしちやつたりい と烈火。

貰い物では嫌らしい。

「贅沢言わないでよ。結構高いの？」

わかる？お母さんがくれたお金だつて三千円。三人でよっすくな

つ！」

「？？」

金銭感覚はわからないのね・・・

数分経つて、ショッピングモールについた。

「ふえーん、もーちゃん、抱つこーー！」

「宗にだつこしてもらつて」

「うえ・・・、そーくん、抱つこ」

「はいはい」

「あ。あつた」

萌音が真っ先に行つたのは雑貨屋。

「何か買つのか？」

ひょい、と何処と無く烈火が現れた。

「うん・・・・・つてええ！？烈火いつのまに！？」

「驚きすぎ」

「そ、それより宗たちは！？」

「ノリコニティ広場で休んでるよ」

「あ、そ」

馴染みすぎ……

「で、それ何？」

「これ？えつとね、友達からオススメされたものなんだけど」と、レジに向いながら言った。

「ミサンガって言つてね、切れると願いが叶うんだって」「へえ、切ればいいのか？」

「人為的にじやなくてね、自然に。昔結構流行つたんだよ」「105円になりまーす。うふ、君彼氏い？結構イケメンだねー」

店員のお姉さんが話しかけてきた。

「こういう人嫌いじやないなー

「違いますよ。」

「あ、そー」

「安いなあ、あ、じやあ、このお菓子セットください」

「まいどおー、君可愛いからおまけしちゃうね、400円ー。」

表示価格と100円もまけてくれた。

「ありがとうござります」

「もーちゃん！そのお菓子なあにー？」

「むーちゅんが愚図りかにひかれてひづけたりあがねる」

「ほんとこ?...じゃあ僕頑張るね」

「そ」で、「ああ」と何かを思い出したように宗が話しだした。

「せつめいでフリマしてたぞ。結構いい服もあったし、安いから

行ってみないか?」

「ほんと?行く行く...」

旅行

「いっぱい買えたね」と夢斗が言つ。

「そうだね」

「おー、お前も持てよーーー」

烈火が言つた。

「嫌だ。重いもん」

「なつ！？」

そんな一人を萌音がなだめた。

宗は嫌な顔せず、（結構な量の）荷物を運んでくれた。

烈火と夢斗が一番の問題児かな。

と萌音は思つた。

家に着くなり、兄の淳平が車に荷物を運んでいた。

「あれ、なにしてんの？」

淳平は「ああ？」と機嫌悪そうに答えた。

「旅行だよ、旅行！ほら、前話しただろ！？田舎の山奥にだよー」

「なんでそんなに怒つてるの？」

「るせえよ！おめえらがいねえから俺一人でやつてんだつの」

「ああ、彼女さんと遊べないからああ

「ぶつ殺すぞ、オルあ」

萌音はキヤハハ、とせせら笑つた。

準備も終わり、夜の七時を回つた頃。

「さ、行くわよ

「夜だよ！？」

「遠いのよ？だって九州にあるのよ？」

「遠つ！」

一日かけて車飛ばすわ、と母が言つ。

運転するのは父だろうに。

「さ。三人も入つて。」

「え、俺らもいーんすか？」

何言つてゐのよ、と笑つた。

どうやら、ずいぶんお氣に入りらしい。

「うわあ

萌音が一言漏らしたのはそれだけだつた。

目的の村はもう少しだ。

綺麗な小川が通り、周りは山々が囲むこの大自然満載の村。
一度人間なんて住んでいるのだろうか、と萌音は思ったが来る間一
人二人と人を見た。

「あとちょっとで着くわよ」

母が唐突に言つた。

「ホテルだけはしつかりしてゐるの。綺麗よ」

まるで来たことのあるかのようになつた。

彼女に言われたとおり、確かに綺麗だつた。

意外と観光客もいるようで、なぜか萌音は安堵した。

「部屋は三階の306・307・308号室ね。」

「はあーい」

「あら、間違えたわ。6~7よ」

「紛らわしい」

「何？」

「なんでもない！」

しまった、つい心の声が。

「午後まで暇だからそちらへんで遊んできなさい、子供でしょ」と
言われたのでホテルから出て遊びに行つた。

「あれは【邪魔だから出てけ】って言つてるんだよね」
「俺もそうとつた」

「宗！」

「ツコリと彼は笑つた。

「女の子一人で出歩かせちゃダメだろ?」
彼は昨日買った服をモデルのように着こなしていた。
まあ、比喩なんだけど。

「紳士さんね」

萌音は「ふふ」と微笑んだ。

ホテルの窓から「萌音ええええ」と烈火と夢斗が叫んだ声が萌音
の耳に届いたが、聞かなかつたことにした。

旅行（後書き）

注意されたので、一応気を付けて書きました

「あれ？ それ何？」

「地図。まあ、こんなところで迷うことないと思つただけど、ね」
確かにね、と相槌を打つ。

ガササ、と茂みが揺れた。

「うわっ」

と声がした。

「？」

「と、都会の人間だ！」

「人を化け物みたいに言つなよ」

「喋つた！？」

「喋るわ！！」

そこには、タンクトップで短パンの男の子がいた。
九州だけど、寒い。

「さ、寒くないの？」

「はん！ 寒くねーよ！」

「ふうん」

萌音は本当に興味がないらしく、

「宗、行こう」

と言つて少年を無視して行こうとした。

が。

「待つてよー！ 都会話聞かせて！」

と呼び止められた。

正直外に出てる自体めんどくさかったので話なんぞしたくなかった。

「嫌だ。早くホテルに帰りたいのに、追い出されてるんだから」

「？」

「お、おい、萌音。いくらなんでもきつくないか？」

「いいの、いいのー！」

強引に宗の手を取せつゝ叫ぶや。

「待つてー」

と、ついてくる。

「どこかで見たことあると黙つたら幼化と鬭斗を知つて一で割つ

た感じの子ー」

宗と萌音がはもつた。

「…………？」

少年は何を言つてゐるのか全くわからなかつたらしく。まあ、それはそうだらうけど。

「なあ、お前の着てるこれなんだ？」

「お前じゃない。あたしは萌音！」

「……………」

「…………まあ。」されば、レギンス。“着てる”じゃなくて“履いてる”ね

「違うのか？」

全く違うじゃない！とキレ氣味に言つてあげても、わからぬ素振りを見せた。

しばらく歩いてみると、夕田が沈むのが分かつた。

「やっぱ、六時」

「ん。そろそろ帰るか？萌音」

「そだね」

しゃがんで小さな花を見ている萌音に宗が言つた。

「なあ、兄ちゃん、姉ちゃん。明日も遊びまう？」

「あたしの家族のちっちゃい子と遊んであげてもうひんざつだよ、と豈つかのよつて四葉で少年を払いのけた。

「やつぱり、あつこと思つんだよ」

と言つ意見に沈黙を返す萌音。

そして、ボソッ、と一言言つた。

「あたしは別とふたりでに散歩したかったのに」

「何が言つたか？」

「ううん、何も」

作り笑顔でそう応えた。

旅行2（後書き）

連続すいません

前に戻ってる気がする

「おい！萌音！お前宗ど二行つてたんだよーーー！」

「散歩だよ」

「俺も一緒に行きたかったのにーーー！」

「そんな子供みたいなこと言わないの」

と言つて部屋に入ると烈火が後ろから抱きついてきた。

「子供でもいい。お前と長く一緒にいたいんだ」

「……………ツー！」

萌音は真っ赤に頬を染めた。

そして、烈火を廊下に突き飛ばし部屋の鍵を締めた。

「どーしたの、萌音ちゃん」

「……………なんでもないよ。ごめんね、ひとりにして？」

「うん、いいよ」

「烈火、萌音ちゃんになにしたのー？」

「……………何もしてねえよ」

「本当は見てたんじゃねえのか」と烈火が問うが、
夢斗は「見てないよ」と微笑んだ。

「あー、そ」

「うん」

「なにそれー？結局二部屋とつたあー？」

「そうなのー。だつて、

『奥様綺麗ですね。おまけにもう人部屋半額で貸しますよ』って

「最初の一言か……」

萌音はせつづぶやき落胆した。

「それとねー？よく聞いたらお布団じゃなくてベッドだつたりしきのよハ」

「！？」

「萌音ちちやんたちおんなじ部屋だから、仲良く寝てねえ？」

「ちょ、お母さん待つてそれ！」

直訳で「男三人と旅行の間一緒に寝る」つてこうの？！
それにベッドだつたら、彼らがもとに戻らないじゃない！

萌音は更に顔色を悪くして部屋に戻った。

「ありえない。悪夢よ、これは」

「もーちちやん…トランプしよう」「トランプ？持つてきてないよ」「おじさんに買つてもらつたんだよ…商店で」「氣前のいい父だつた。

四人で大トランプ会を始めた。

「ダアーー…また負けた！」

「へへーん！烈火弱つちー！それにしても宗くんつおいよね」
宗のあぐらの中にちょこんと座つている夢斗が言った。

「そつか？だつてお前の見えるし」「するい！」

「なあ、萌音。お前もここに来るか？」

と自分のあぐらを指さす烈火。

「なつ！？」

また真っ赤になつた。

そして、

「何ふざけたこと言つの！」

「ほんとだよ！もーちゃんは僕のだからね！」

と、夢斗が言つた。

「んだと、てめえ！ガキのくせによお」

「べー、だ！」

転校生（前書き）

人物：

・芦田 萌音

主人公。

・夢斗

・烈火

クツシヨンが擬人化した男の娘。

ひざ掛け毛布が擬人化したちよっぴり不良な子

・宗

クツシヨンが擬人化したしつかりもの。

・園田 美恵子

萌音の友人。

旅行も終わって、無事に私たちは家へと帰った。

「うつわー、久々！シャバの空氣つーの？」

「烈火、変な言葉使うなよ」

「チエ。それだから、ユートーサーの宗君はよお烈火と宗が口喧嘩を始めた。

いつもより軽い。

何かスッキリしたのかな？

「おはよ」

「あ、萌音！やっと来た！」

「どうしたの？」

萌音が問うと、転校生が来てたらしい。

別にどうでもいいんだけどな・・・

仕方なく友人に連れられ、転校生のもとへ向かった。

「美恵子お、別に見なくてもいいよお」

「えー！見ときなさいよ！結構イケメンだし！」

美恵子のイケメンって信用できないよー、などとつぶやきつつも弓張られる。

「ほら、見てみて！麻生くん！」

「あ、園田さん」

「何？もう知り合いなの？順応早くない？」

「ボソ、と突っ込んでしまった萌音。

イケメンを前にして緊張している美恵子が、萌音の手をつねり始めた。

正直痛いので、無理やり解いた。

「えーっと、はじめまして？芦田萌音です・・・・・・

「あ、君が萌音さん？」

「？ はあ」

曖昧な返事を打つ。

「一か、なんで名前？馴れ馴れしい・・・・・・

「美人で有名だよね」

「それは、偏見かな」

即答だった。

「ね、どうだった？」

「別に？タイプじゃないかな」

と、言つた瞬間。

萌音の脳裏には三人が。

・・・・・・・・・・・・

「まあ、いつか」

「えー、何？どしたの？」

「なんでもない」

三人

「好きな人、かあ」

家に帰つた萌音は美恵子の言葉を思い出していた。

「いるのか？」

「別にいないけども、

気になる人ならー・・・・、つて、ええええ！？」

振り向くと烈火が。

「のののののノックしなさいって！…」

「しだぞ？手が痛いぐらい」

確かに烈火の手は真っ赤だつた。

やば、聞こえなかつたなんて言えない・・・・

少し反省する萌音だつた。

「ところでなんの用？」

「ん？・・・・・いや、ちょっと別に、何もないけど」

「なにその日本語？」

「だつて、イケメンの転校生來たつて言つから」

「私言つた！？」

ガタン、と真つ赤にして立ち上がる。

「い、いや・・・・・」

それに対し、

本当にびっくりしたらしく烈火は一步下がつた。

「美恵子さんから聞いた」

「なんでお前がそいつを知つてゐるのか」とツツ「ハリを入れようとしたが、

いちいちめんづくさいので省く萌音。

「何？やきもち？」

「ち、ちげえよ！」

今度は烈火がいきなり真っ赤になつて立ち上がる番だつた。

「でも、大丈夫。私は三人が一番好きだから」

「俺じゃなくて？」

「独り占めはもつたといないじゃない」

「ツコリと微笑んだ。

「『めんなさい』」「

今日、萌音は例の転校生に告白された。

「私、好きな人、いるから」

「……………そり

「あ、だけど、これからも普通に接してね。

私の好きな人、いついなくなつても、

おかしくない、し・・・・・・・・・・

「あれ、何言つてるんだろ・・・・

「ごめんね、じゃあ・・・・・・

と言つて駆け出した。

それからには、授業も部活も何もかもサボつた。

「ただいま

「あれ、萌音・・・・・なんか早くないか?」

一番最初にあつたのは、宗。

「全部サボつた」

「はあ?」

「・・・・・・・・・・・・・・

そして脱力してそのまま玄関に座り込む。

「お、お、こ、汚いぞ。まあ上がれ

「いい、こりで

「ん?」

「今日お、咲田されたの」

三人には、全部話した。

三人をふと思い浮かべたこと。

大好きだった、って思ったこと。

それらを話してたらなぜか。

ふつと軽くなつた気がした。

「えへへ。嬉しいなあ。僕ももーちゃんすき」
そんな当たり前の会話がとても楽しかった。

「ありがと。あたしも　」

ブチン。

「 . . . ん」

起きるとやうには、血圧。

時間は。

「時計止まってる」

わからなかつた。

そつか、そつといえば、勉強中に眠くなつて 。

クッションとひざ掛け毛布は、動かない。

「夢・・・・・」

そつづふやき、私はその三つを優しく撫でた。

「ここ夢。」

監（後書き）

強制終了下さいません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7932r/>

うちの子変化

2011年10月3日11時20分発行